

日本語教育研修会（2014.1～2014.12）講演要旨

雑誌名	筑波大学留学生センター日本語教育論集
号	30
ページ	339-341
発行年	2015-02-28
その他のタイトル	Abstracts of the Lectures given at the Japanese Language Education Training Meeting (2014.1～2014.12)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00125063

日本語教育研修会（2014.1～2014.12）講演要旨

日本語学習者の評価を考える

近藤ブラウン妃美（ハワイ大学マノア校教授）

教師なら、誰もが学習者にとって公平で意味ある評価をしたいと願っている。私の講演では、日本語教育現場でそのような評価を行う上での問題点や今後の課題を取り上げた。今日の日本語教育現場では、テストを利用した評価だけでなく、自己評価のような代替的アセスメントも広く利用されている。現場でテストを使っても使わなくても評価を行えば、必ずその評価結果の妥当性や信頼性が問題になる。例えば、公平で適切な成績判定を行うためには、期末試験のみというような単一の評価法に頼るのではなく、色々な形式の期末試験や小テスト、そして自己評価など複数の評価データに基いて行うことが大切である。そうすれば、より妥当性や信頼性のある判定結果が期待できる。また、学生に「よい教師」と見なされている教員は、通常、評価を成績判定の手段としてのみ使っているのではなく、学習者の学びを支援するための評価を行っている。つまり、学習者へのフィードバックなど、学習者の役に立つ評価なしに、優れたティーチングはありえないと考える。しかしながら、いい評価をしようと思えば時間や手間、そしてコストもかかり、それにまつわる問題は、もちろんある。しかし、教員が自分のできる範囲で、できるだけ公平で意味ある評価を行うことは、無理なことではないと思う。講演では、参加者に自分自身の評価の在り方について振り返り、今後の評価課題について考えることを呼びかけた。

対照研究と言語教育

井上 優（麗澤大学教授）

言語の対照研究は、複数の言語を「比べて考える」ことを通じて、各言語の特性を分析的にとらえ、各言語を公平に見る（相対化する）ための視点を見出す研究である（研究領域というより「研究のやり方の一つ」と考えるのがよい）。対照研究には、(1)母語でない言語に対する素朴な疑問を出発点にできる、(2)各言語の特性がより具体的に見えてくる、(3)母語ではない言語の現象について「少なくとも頭ではわかる」という共感をともなって理解できる、というメリットがある。私が日本語と中国語・韓国語の対照研究をおこなうのも、比較対照を通じて「こう考えれば日本語母語話者に中国語や韓国語の現象が自然に理解できる」という説明を見出すことができ、母語ではない中国語・韓国語が身近なものに感じられるからである。対照研究の意義として「自分の母語ではない言語（学習言語あるいは学習者の母語）を身近に感じられる視点を提供する」ということがあり、言語教育においてはそのことが特に重要である。とりわけ言語行動に関わる事柄については、いきなり「文化」と結びつけて考えるのではなく、相違の背後にあるメカニズムを分析的に考える対照研究をおこなうことが必要である。日本語教育のためには、外国語を母語とする日本語研究者が「こう考えれば自分と母語が同じ学習者に日本語の現象が自然に理解できる」という説明を見出す対照研究をおこなうことが重要な意味を持つ。

第一回 文化とことばのコラボレーション

主催：筑波大学留学生センター文化とことばのコラボレーション実行委員会

「第一回文化とことばのコラボレーション」を二日間にわたり留学生センターにおいて開催した。1日目のアニメータ室井康雄氏による講演会「アニメを知ろう」では、グループに分かれて描いた絵をその場でアニメとして映すなどの体験を入れながらアニメ製作過程について話を聞いた。2日目の午前には日本語教育や日本文化に関する口頭発表およびポスター発表が行われた。午後は柳家さん喬師匠の「留学生のための落語会」。落語公演に引き続いて「落語と日本語教育」と題して、柳家さん喬師匠を囲んで、アンドレ・ベケシュ（リュブリアナ大学）、酒井たか子（筑波大学）、ケード・ブッシュネル（筑波大学）による座談会が行われた。

口頭発表

アンドレ・ベケシュ（リュブリアナ大学） 文化を通じて言語を学ぶために

砂川有里子（筑波大学） 中級段階からの日本研究に関する専門読解

寺尾梓（横浜国立大学非常勤講師） 日本のアニメにみられる『日本らしさ』—絵巻物との関係から—

柳田しのぶ（筑波大学非常勤講師） 演劇をつくる—ある日本語教師の試み—

ポスター発表

堀恵子（筑波大学非常勤講師） 日本語・日本文化をテーマにした授業の実践報告—中級レベル短期留学生を対象としたクラス—

井上里鶴（筑波大学大学院生） 上級日本語クラスにおける小話の作成授業—「わたしのちょっと面白い話」を利用して—

亀井敦郎（筑波大学大学院生） 落語小咄のおかしみの分析

園田昭成（筑波大学大学院生） 茶道を通じた日本理解

スワンナクトパッチャラーバン（筑波大学大学院生） LINEと日本語学習

董然・孫鍼（筑波大学大学院生） 落語小咄のe-ラーニングのためのプログラム開発

木村仁美・谷口雄大・寺尾侑子（筑波大学学類生） Japanese Kyushoku／日本の給食

筑井瑞穂・村上遼・安富元彦（筑波大学学類生） Medical Innovations from Japan／日本発信の医療機器

筑波大学留学生センター日本語研修コース学生有志 発信型文化授業の試み：「日本の文化クラス」と「私の国」の紹介